

# 先端科学技術研究科 修士論文要旨

所属研究室 (主指導教員)	サイバネティクス・リアリティ工学 (清川 清 (教授))					
学籍番号	2411304	提出日	令和 8年 1月 19日			
学生氏名	横井 茉絃					
論文題目	対話と画像生成 AI を用いたノスタルジア誘発システム					
要旨						
<p>情報技術の発展により、大規模言語モデルや画像生成技術を用いた対話型AIは、利用者の発話内容や文脈を柔軟に理解し、状況や経験に即した応答や表現を生成できるようになった。これにより、従来は困難であった、個人が自身の過去経験を想起し、意味づけを行う内省的な過程そのものを支援することが、技術的に可能となりつつある。このような背景のもと、日常的な情報システムにおいて、過去の経験をどのように振り返り、現在の自己理解や感情と結び付けていくかが重要な課題として顕在化している。</p> <p>心理学研究において、過去の経験の想起は自伝的記憶として位置づけられ、自己理解や感情調整に深く関与することが示されてきた。とりわけ、自伝的記憶に基づいて喚起されるノスタルジアは、ポジティブ感情の喚起、社会的つながり感や自己連続性の回復、自尊感情の向上など、多様な適応的心理機能を有する情動体験として再評価されている。一方で、これらの心理的機能を日常的な情報システムの中で安定的に引き出す方法については、十分に検討されていない。</p> <p>既存のノスタルジア誘発研究では、文章回想課題や音楽・写真などの刺激提示が主に用いられてきたが、刺激内容があらかじめ固定されている場合が多く、個人ごとの経験や主観的意味づけを十分に反映できないという課題がある。また、視覚刺激は記憶想起や情動喚起に有効である一方で、写実性や抽象度といった表現形式の違いが、想起体験やノスタルジア感情にどのような影響を与えるのかについては、十分に明らかにされていない。</p> <p>本研究では、対話型AIによる言語的な記憶想起支援と、画像生成AIによる視覚的表現を統合したノスタルジア喚起支援システムを構築する。対話を通じて利用者の自伝的記憶を段階的に想起・構造化し、その内容に基づいて個人化した生成画像を提示することで、ノスタルジア体験の喚起と深化を支援することを目的とする。</p> <p>本研究は二段階の実験から構成される。実験1では、生成画像における視覚表現スタイルの違いがノスタルジア喚起に与える影響を検討し、実験2では、実験1の知見に基づいて構築した提案システムを用い、従来のテキストベースの回想手法および画像を伴わない対話条件との比較実験を行った。</p>						